

# 佐賀県立博物館報 No.30

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 09522(4)3947



## 古伊万里人形

江戸中期（1680年前後）の有田内山の焼成  
品で、当時の役者風俗から着想した色絵磁器  
の人形である。全体的に力強い作調で、いか  
にも平和な庶民生活を反映した姿態と表情で  
ある。成形も手造りの特色を残しているが、  
特に正面は「きよぎ」の色相を主調として、  
唐草花文を描き、裏面は野菊を花詰め様に描  
き効果づけている。（全高47.0センチ）



目次	・古伊万里人形	1
	・日本伝統工芸展示紹介	2・3
	・庚申堂塚発掘調査概況	4・5
	・新発見、青木繁油彩について	6
	・小山富士夫先生追悼茶会より	7
	・博物館日誌・行事のお知らせ	8

## 日本伝統工芸秀作展の御案内

- 会 期 5月23日(日)～6月6日(日)
  - 会 場 佐賀県立博物館 3号展示室
  - 主 催 日本伝統工芸秀作展佐賀県実行委員会・佐賀県教育委員会・佐賀県立博物館  
佐賀県陶芸協会
  - 後 援 文化庁・県文化団体協議会・佐賀美術協会・各報道機関
- ※観覧無料

わが国に永く伝承されている無形文化財としての工芸技術は、ややもすると機械文明の発達と共に年毎に失われがちである。したがって文化庁では、日本の誇るべき伝統工芸を保存し、後世に継承するひとつの事業として、昭和29年より日本伝統工芸展の開催を助成し、その都度、優秀な作品を国として買上げ保存している。

このたび佐賀県立博物館で開かれる日本伝統工芸秀作展は、これまでの過去22回におよぶ日本伝統工芸展の秀作の中から、112点を選び展示される。

その内容は、陶芸37点・染織22点・漆芸21点・金工21点・木竹8点・人形3点で、国の重要無形文化財技術保持者(人間国宝)・技術保存団体の代表者などの秀作の

特別出陳であるだけに各方面より期待されている。特に佐賀県関係者は、新に人間国宝指定の中里無庵をはじめ、12代・13代の酒井田柿右衛門、12代・13代の今泉今右衛門、先代の奥川忠右衛門、染色工芸の鈴田照次(敬称略)の記念すべき秀作が出陳されるので、現代の伝統工芸の全貌を鑑賞するのにこの上もない機会である。

- 同時開催/ 第22回 日本伝統工芸展佐賀県入選展  
大展示室・出品者23名



赤地金銀彩半歯文飾蓋  
人間国宝 富本憲吉(故)



はじきはだ田口蓋  
人間国宝 長野埜志



黒漆地に白文の文飾箱  
蒔絵螺鈿有職文飾箱  
人間国宝 松田権六



手織木綿地型絵染着物の  
手織木綿地型絵染着物の  
人間国宝 芹沢銈介



青軸十字文六鉢  
重要無形文化財技術保持者  
浜田庄司 作



八つ木瓜形唐草象嵌鉢  
重要無形文化財技術保持者  
米光太平作

## 庚申堂塚発掘調査概況

所在地 佐賀県鳥栖市神辺町247の2、261番地、262の1（通称庚申堂）

調査期日 昭和51年3月10日～19日

調査者 佐賀県立博物館・鳥栖市教育委員会

筑紫山地の権現山（626m）や九千部山（847m）を源として断層線に沿って蛇行しながら南流する秋光川・大木川は筑後川に注いでいる。この両支川が山地より流下し、筑後川に合流する間は、背後の山地が南東へと漸移して低丘陵となり、ついで平坦部となって筑紫平野の一角を形成する。

中でも、田代本町や庚申堂部属に属する比高約40～50mの中位段丘上にこの古墳は築造されているが、さらに南東250mには国の史蹟で室内に装飾文様が描かれている田代太田古墳があり、ほかに剣塚・岡寺古墳の2前方後円墳があって東肥前では有力な古墳の分布する地域である。

庚申堂塚は標高約52mの台地上に築かれていて、主軸の方位を北より27度西側にとり前方部を北西に向けている。

墳丘は全長約60m、後円部の径は標高53mの線を結ぶと約30m、前方部巾は約48mとなる。後円部の比高は標高53mの等高線より数値を求めると約5m、前方部の高さは後円部の高さとは大差ないが約0.5mだけ高い。

前方部には標高55mから56mの間に広狭の差はあるが巾約3mの平坦部がめぐって、この古墳が二段築成であることを物語っている。また、前方部前面には巾約5mの帯状の窪地があり、古墳東側および西側にも窪地状の遺構があって、これ等の窪地は古墳をめぐる周溝を思わせる。

標高54mの線を追って東側のくびれ部にいくと巾約4mの造り出し様の平坦部があるがこれは築成当初に構築したものであるのか、後世二次的な変化によるものかははっきりしない。

前方部の周溝外側には僅かに低く残る径約5mの円墳状の堆土がある。ここには以前巨石があったと伝えられており庚申堂塚の陪塚とも考えられる。

墳丘には真石が前方部前面と西側斜面によく残っている。前方部斜面をめぐる平坦部や墳丘周辺からは円筒瓦輪片が採集されているが、古墳周溝の東側でも住宅建設の際多数のこの種の地輪が出土したといわれている。

後円部の東及び東側斜面には石段が取り付けられて後円部中央附近より前方部の頂の庚申尊神拝拝に向う通路となっていたため築成当初よりいくぶん倒平されているものと思われる。また後円部中央をやや離れた南側には

戦時中に掘られた防空壕が陥没して落ち込みができている。

今、古墳にはスギ、ヒノキが植林され、周溝にはかなりの土が流入して埋まり、雑木、灌木が繁茂し、その外側一帯は畑地がめぐるが南や東側には人家が建っている。

内部主体は後円部封土のほぼ中央直下に構築された横穴式石室で、主軸は北より60度東にふれ、ほぼ南西方向に開口している。

戦時中、後円部西側より掘られた防空壕は、当時すでに玄室まで掘り進められていて石室は開口していた。この掘削で羨道南壁の積石の一部が露出していたが今回の調査で、新たに北壁を確認した。

この結果羨道の平面形は南と北の側壁間の巾約175cm、羨道の長さは南壁で約140cm、両羨道側壁の基底部分は基盤層に接して、長さかほぼ20cm前後の花崗岩自然石を数個配列し、高い所で8段程度積み上げ、北壁で80cm、南壁で1mの高さになっている。

羨道部南壁は玄室南壁のほぼ延長線上にあるが、北壁は玄室北壁の延長線より南側に張り出しているため羨道部は玄室主軸の線に照して南側に片寄っている。

天井部からはかなりの量の土が崩落していたが残った封土の部分には版築の模様がよく残っており、西側壁上部の石積み構造からは天井部は構築されていないものと考えられる。

羨道部と玄室とは2個の柱状の抽石で仕切れられ、両抽石間の床には巾約20cm、長さ約60cmの柱状の敷居石で仕切れられ、その天井部には巨石を横架して高さ60cmの入口をつくり、高さ約80cm、横50cm、厚さ25cmの花崗岩の閉鎖石を斜位に置いて閉鎖していた。羨道床面はすでに荒らされていて敷石の有無は確認できなかった。

玄室内には土が30～40cmの厚さで堆積していた。これを掘り出した結果、平面形は奥行きが中央部で4m、奥壁巾2.6m、前壁巾2.25mで前壁側が35cmだけ短かい概長方形をした形態をしている。

奥壁には巾1.85m、北側壁にも奥壁側から2mと1.5mの大形礫石を地山に掘り込んで立て、長さの不足は小さな石で補っている。南壁も大体同じ手法で石を配っている。

壁の構築は巨石を縦に壁体として地山に立て、その上に塊石を横積みにして持ち送り式に積み上げ、最後に長

径70～80cmの長楕円形の天井石2枚で覆ったもので、奥壁は高さ約1.6mの巨石の上に天井まで約10段の塊石を持ち送り式に積み上げている。塊石と塊石との隙間には板状の小石を粘土とともに詰めこんでいるが、こうした手法は他の各壁面にも共通している。

このようにして構築された壁面には天井から腰石にいたるまで全域にわたって赤色顔料が塗布されていて場所によっては1mmの厚さで残っているところもあった。

石室の構築に用いられた石材はこの地方に産する花崗岩が大部分をしめている。花崗岩の小塊はこの古墳が立地する中、高位の洪積段丘より集められたものと思われるが、風化が進み石の質ももろくなっていて壁面の一部を構成するこの種の石材には重量に耐え得ずにはび割れを生じているものが多く、雨水の侵入とともに石室の崩壊の危険性をはらんでいる感がある。

多くの石材の中で北側の腰石として使用されていた巨

石の1つだけが結晶片岩である。これも近くにこの種の岩石の露頭がありその一帯より運ばれたものであろう。

庚申堂塚は防空壕が玄室に通じていたため幾たびか盗掘を受けていた。数石は根こそぎにはがれて流入した土とともに散乱していたため、屍床の確認も副葬品を原位置でおさえることもできなかった。しかし、遺物には土器片や鉄器類の破片など若干検出しており、ほかに石室内外の温度や湿度など多くの貴重な資料を得て今回の調査を終了した。

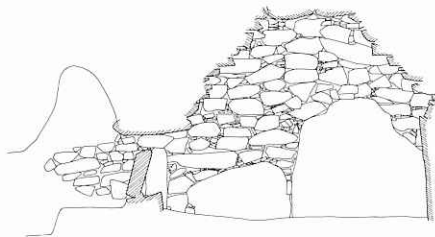
今後はこれ等の資料を整理検討して結果を報告する予定である。

(学芸課 志佐暉彦)

庚申堂塚 測量図  
(測量 鳥栖工業高等学校)

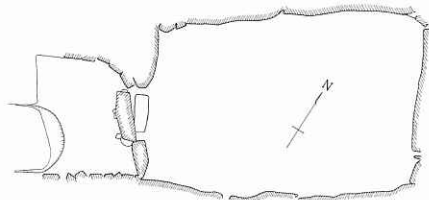


玄室北壁



玄室平面図

0 0.5 1 m



資料紹介

「織月帰舟」

画布 49.5×60.5cm

1910年作

## 新発見、青木繁油彩について



昨年10月、佐賀市内の旧家から発見されたものである。たまたま土蔵改築にあたって日の目を見たこの作品は、素材についての確かな資料を欠くが、少くとも60年の間一度もこの土蔵を出なかったのは事実である。土蔵を入れてすぐ二階へ通じる階段と南向きの壁面とのわずかの空間に、画面を壁面に向けて取蔵してあったため、永くそれが油彩画とも気付かれぬまま眠っていたという。画面、裏面ともかなりの埃をかぶっていたのであるが、油性を含まない乾質のものであったため、容易に埃を取除くことができ、またいざさかの損傷をも画面に見せていない。

画面左下には署名、年記があり「T. B. S. AWOKI 1910」と読める。木枠、額縁とも元のままとと思われる。

画面は中央よりやや下部に水平線をとおり、左下と中央から右へ流れる岩礁がつくる空間に一艘の小舟を配し、左手を櫓にかけ右手を仲間たちの方へ伸ばした裸体の青年立像と、岩礁に立つ三人の男女による構成である。さらに左上方には新月を添え、その下には大小二つの島影が見える。新月と夕映えの海面からして、夏の日のある夕、漁から帰途につく漁師をテーマにしたものであろう。

しかし、この画面が一見してわれわれを捉えるのは、無表情に右方へ去ろうとする男女の動きに右手で呼応しようとしながら、外洋に続く島影と新月の作る空間の深

さにも引きつづられているかのように見える、この若き青年の姿態であろう。しかも岩礁の三人がいづれも簡略ながら衣類を身につけているのに対し、この青年だけは全くの裸体であることにもある種の寓意を思わせる。あたかもこの青年は晩年の青木自身を象徴しているかのような姿で立ちすくんでいるのである。

さて、この作品の調査にあたっては、九州芸術工科大学教授岸田勉氏に全面的に依頼した。青木作と断定された根拠としては要約して次の2点があげられる。a) 岩場、波頭、人物の形態や筆触、色感の比較において、青木作の海景他の作品と近似していること。b) サインの照合については、同年作「木下大尉像」の特徴ある(W)の字体と符合すること。

さらにこの作品が、「海の幸」におけるドラマチックな激情と「漁夫晩帰」に見る知的な写実との折衷的な意味を持つのものでロマン的香気に満ちていることを指摘されている。

また、この作品の描かれた場所については、ある程度の推定が可能であることと、同年作の「海」（生誕90年記念青木繁展カタログ667）や「帰船暮色」（芸術新潮1975年6月号掲載）に符号できる景観が唐津の西方に発見できることなどと合わせて、唐津地方における青木の足跡を考慮する上でも当作は貴重な意味を持っているといえる。

（学芸員 三輪英夫）

## 小山富士夫先生追悼茶会より

国際陶芸評論家として国の内外に知られ、ことに若い陶芸作家の育成に生涯を注がれ、また美術館活動にも積極的にあたられた小山富士夫先生は昨秋世を去られた。岐阜、五斗蒔の、花の木窯で焼成中に急逝されたので各方面よりその死がいたくおしまれていると共にその業績が改めて注目されている。

特に福岡、佐賀の両県内の陶芸作家は、小山先生在世中、陰に陽に指導を受けた人びとが多いだけに、一層その遺徳はしのばれている。その先生のありし日を偲び、世界の陶芸界につくされた数々の功績を語りあう追悼茶会が去る3月27日に当館構内の旧佐賀城の南堀に面した清恵庵で催された。

この追悼茶会は、小山先生と特に親交の深かった福岡愛陶会幹事長である蒲池格氏が発起され本席を受けもたれ、その世話役は佐賀県陶芸協会の永竹常任理事が当った。当日は、追悼茶会にふさわしい早春の陽ざしの中で催され、遺族代表として長男の小山岑一氏（鎌倉市、二階堂窯）が出席された。また出光美術館側として三上次男先生も参席され、県外からは福岡の田中丸友子さまをはじめ先生にゆかりのある方々や日頃、先生と語りあった愛陶家も出席され、県内からは、大園県立博物館長、裏千家淡交会県支部長であり肥前陶磁研究会副会長の竹田恒夫先生も来席された。ことに永い間、工芸制作の面

で先生の指導にあずかった染織の鈴木照次氏、陶芸の今泉今右衛門氏、丸田正美氏、江口勝美氏、中島宏氏らが席に加わり、おりし日の先生が美濃の五斗蒔、花の木窯で造られた茶陶の数々に心をうたれたようであった。点心席には、鎌倉の二階堂窯や花の木窯あるいは武雄の黒車田窯で造られた酒器類が登場し、酒豪としての小山先生のエピソードや回顧談が続き意義深い茶会であった。なお当日の会記は次の内容であった。

本席	主 蒲池 格	永竹 威
	掛物 天平写経	
花入	吳須刷毛目角瓶	古山子作
花	季もの	
香合	加食	古山子作
釜	雲竜釜	
水指	唐津鉄斑文	古山子作
茶器	粉溜花蒔絵	雪吹
茶碗	鉄刷毛目	古山子作
	賛 絵唐津	#
茶約	山ざくら	即中齋歌銘
建水	木地曲 蓋置	青竹
菓子器	青白磁平鉢	古山子作
午菓子器	輪花米盆	(以下略)



## 博物館日誌

2月22日	「佐賀大学卒業制作展」開場	3月13日	博物館協議会開催
2月23日	ルアー西ドイツ神戸総領事夫妻博物館及び茶室見学利用	3月18日	郁芳会より染付花びん寄託
2月28日	「佐大卒業制作展」終る (総観覧者数1078名)	3月22日	伊万里市長浜婦人会「三根霞郷展」観覧のため来館(65名)
3月6日	「三根霞郷展」開場	3月27日	徳島県博物館田中正陽氏来館
3月8日	佐賀東高生(126名)「三根霞郷展」観覧のため来館	4月1日	人事異動
3月9日	今泉今右衛門・鈴田照次氏他来館	4月7日	「三根霞郷展」終了(総観覧者数3923名)
3月10日	李中国大使館参事官一行来館 寄贈 讃岐石 大町町長 梶原卓馬氏 玄武岩賀集塊岩 友田岩次郎氏 (相知町池)	4月8日	常設展飾付のため臨時休館(10日まで)
		4月9日	環境整備課よりミサゴ、マナヅル、オジロワシ標本受納
		4月20日	NBCから「赤絵旋風」フィルム購入

## ●行事のお知らせ

修学旅行等の計画に博物館の見学を折込んで下さい。

	常	設	展
佐賀県の歴史と文化展	4月1日～8月1日 52年 12月5日～2月24日	大人 50(30) 大・高生 30(20) 中・小生 20(10)	佐賀県の地質や自然および先史時代から、現代にいたる歴史と文化についての、理解を深めるために自然史、歴史、美術工芸の各部門について、系統的に資料を展覧する。
	(月曜・祝日の翌日休館) 団体は20名以上( )内は団体料金		

企		画		展	
展覧会名	会期	観覧料 ( )内は団体料金	展覧会名	会期	観覧料 ( )内は団体料金
日本伝統工芸秀作展	5月23日～6月6日 会期中無休	無料	佐賀県高等学校美術展	12月1日～12月6日 会期中無休	無料
佐賀美術協会展	6月16日～6月20日 会期中無休	常設展の料金を含む	佐賀県学童美術展	12月9日～12月14日 会期中無休	無料
県書道作家協会展	7月15日～7月20日 会期中無休	無料	第4回 教職員美術展	12月18日～12月23日 会期中無休	無料
県書道教育連盟 七夕書道展	7月22日～7月27日 会期中無休	無料	52年 九州・沖縄グラフィック デザイン展	1月5日～1月9日 会期中無休	無料
柿右衛門展	8月29日～9月26日 会期中無休	大人 300(250) 大・高生 200(80) 中・小生 100(50)	九州の原始文様展	1月15日～2月24日 月曜・祝日の翌日休館	大人 200(150) 大・高生 150(80) 中・小生 100(40)
歴史の展 佐賀400年をたづねて(第1部) 近代佐賀美術秀作展(第2部) 佐賀県立美術館	10月10日～11月8日 会期中無休	無料	肥前の近世絵画展	3月5日～3月30日 会期中無休	大人 250(200) 大・高生 150(80) 中・小生 100(40)
佐賀県美術展	11月20日～11月28日 会期中無休	大人 150(100) 大・高生 100(50) 中・小生 50(30)			

## ●人事異動

昭和51年4月1日付

- 転出  
学芸課普及係、主事音成昭道、佐賀県立ろう学校主事へ。
- 転入  
学芸課普及係へ、主事徳永 朗、神埼郡仁比山小学校主事より。

博物館報 第30号  
発行年月日 昭和51年5月1日  
編集 大 園 弘  
発行 佐賀市内1丁目15～23  
佐賀県立博物館  
印刷 日 之 出 印刷